

西宮渡辺心臓脳・血管センター 管理者 兼 院長 挨拶

2022年4月から西宮渡辺心臓脳・血管センターの病院管理者を勤めさせていただいております。2024年4月からは院長を兼務しております。

当センターは皆さまご存じのように、西宮周辺地域の心臓・脳疾患の救急医療を24時間365日休むことなく行っています。ハード面においては、心臓・脳血管カテーテル室が3室あり、また最新2管球192列の冠動脈CT装置を導入し、少ない造影剤量・被爆量での良質な画像所見が得られるようになっております。2024年にはさらにハイスpek的なCT装置が導入され、さらに少ない造影剤量・被爆量で現有装置としては最高の画質が得られるようになりました。エポックメイキングな装置が市場に出たからと言って、ほとんどの病院ではすぐには導入できません。当センターがこれができるというのは素晴らしいことだと思います。

当センターでは夜間・休日も専門医による3人当直体制にて救急対応しているのは従来通りであります。ラピッドレスポンスカーを導入してから、急性心筋梗塞の緊急カテーテル治療は近隣の大規模病院と比しても多くの方々に救命できています。心臓血管外科は緊急手術に対応しながら、虚血性心疾患・弁膜・大動脈疾患の高度先進的治療も行い、遠方からも多くの方々に受診していただいております。集中治療室は常に忙しく稼働していますので、西宮地域の急性期医療におきましても十分貢献できていると自負しております。今年度は準集中治療室とでもいうべき高度治療室を増やし、また法人内の病院間の連携を良くすることにより、従来にまして断らない救急医療を実践できております。

不整脈専門常勤医によるカテーテルアブレーション治療開始から9年以上経ちました。単に心房細動のカテーテルアブレーション治療を行うだけでなく、不整脈の患者を総合的に診療する体制を整えております。救急疾患を受け入れるだけでなく、心臓弁膜症、慢性心不全をはじめとした心疾患についても総合的に高いレベルの診療を行っております。それには、以前から高い評価をいただいている当センターの心臓・血管超音波と心臓リハビリテーションがキーとなると考えています。

心臓血管外科も特に低侵襲心臓手術(MICS)を積極的に取り入れ、救急医療のみならず、待機的な心臓大血管手術も増やしております。また、末梢動脈・静脈疾患についても、着実に実績を上げてきております。

2015年に設立された脳卒中センターでは、2025年4月にメンバーが一新されました。その後も脳卒中救急医療も24時間365日行っております。特に脳梗塞急性期の血栓回収などの血管内治療に注力し、多くの脳血管障害の患者さんを救命しております。

これからも高い技術と人間性豊かな医療人を育成し、次代を担う人材を育成するように努めてまいります。当法人が医療理念として掲げます「『敬天愛人』～命を敬い人を愛する医療の実践～」のより高いレベルでの実現に貢献できればと思います。どうぞよろしく願いいたします。

西宮渡辺心臓脳・血管センター 管理者 兼 院長 増山 理

西宮渡辺心臓脳・血管センター 副管理者あいさつ

それでも前に進んでいく

「敬天愛人」「住み慣れた街で最新で最良の医療が受けられる病院」「地域の安心と安全に貢献出来る病院」という祖父の思いが詰まった病院に戻って来て5年目の年となりました。

昨年、私たちの法人は設立60周年という大きな節目を迎えました。多くの方々のご協力のおかげで、記念式典を盛大に開催できました。また、この機会に改めて自分たちの原点やルーツを見つめ直すことができました。

昭和40年11月、当法人は誕生しました。いまとは全く違い、当時このあたりは一面の田んぼで、本当に病院が成り立つのかと心配された時代だったそうです。創設者である祖父にも、おそらく大きな勝算があったわけではなかったと思います。そのような状況で始まった当法人ですが、「決して門を閉ざさず今できる最善を尽くす」という思いのもと、地域が苦しいときであっても、かならず患者を受け入れ続けてきました。

その思いは現理事長にも引き継がれ、阪神大震災においてもコロナ禍においても当院は地域の最前線に立ち続けました。

祖父が田んぼの真ん中に小さな病院を建てたときから、現理事長を経て当法人は大きく変化しました。それでもその思いだけは変わりません。

さらに、心臓脳・血管センターでは増山院長が法人理事へと就任し、神戸中央市民病院から木原先生が新しい院長として着任されます。増山先生は病院長として各大学との連携の強化を果たしてくださいました。京都府立医大を始め、大阪医科薬科大学、兵庫医大からも専攻医が来て勉強できる体制を築き上げてくださいました。

木原先生は日本最高峰の救急病院で病院長をされていました。あのコロナ禍においても中央市民のトップとして力を尽くされていました。増山先生の体制を引き継ぎつつさらに当センターを発展させてくださると確信しています。

また、本院ではダビンチの導入を行います。手術中の「力のかかり方」を感じ取り、無駄な力を減らしてくれる最新の手術ロボットです。

近年、高齢者の緊急手術がとて増えています。穿孔や絞扼性イレウスなどの緊急手術の割合は6割近くにも達しています。そのような状況にも関わらず、近年外科集約化に対する対応が叫ばれており、「外科医に選ばれる病院」をめざすことが喫緊の課題になります。この規模の病院でという声も囁かれますが、そういった状況に対する当法人の回答の一つとなります。

医療業界に対しては逆風吹きすさむ昨今ですが、当法人は負けることなく創設者の思いを受け継ぎつつ、引き続き、改めるべきは改め、取り入れるべきは取り入れていきたいと思っています。

最後になりましたが、この節目の年を迎えることができたのは何よりも、地域の方々や近隣の先生方のご理解とご支援があってこそだと思えます。どうか皆様におかれましても、引き続き温かいご支援とご協力をお願い致します。私としても少しでも地域をよくすべく微力を尽くしていく所存です。2026年度もよろしくお願いいたします。

副管理者 渡邊 慶明